
携帯電話？

ANOIA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

携帯電話？

【Nコード】

N8047A

【作者名】

ANOIA

【あらすじ】

ミチタカとは、いわゆる恋人同士だった。ずっと前、私がもつと会いたいというと、ミチタカは私にそれを買ってくれた。これで寂しくないな、いつでも電話を掛けてこいと私に携帯電話をくれた。

「コレやるよ」

ミチタカがくれたのは、小さな携帯電話だった。

「これで、いつでもお前と話せるな」

「うん！」

私は、いつでもミチタカと話せるんだと思って、とっても嬉しかった。

その時から、その携帯電話は私の宝物だった。

携帯電話

携

「えゝ？ それってホント？」

ミチタカは楽しそうに笑う。

私もそれに釣られて笑う。

尻に敷いたクッションの位置を直しながら、電話を持ち直した。彼との電話は、私の中で心の支えだった。

「そんなことあるわけないじゃん」

他愛ない会話。それが私にとってかけがいのないものだった。
ミチタカは仕事の都合で地方に居るらしい。もう半年もあつていない。

でも、三年前にくれた携帯電話があるので寂しくはない。

だから、私は週末になるとミチタカに電話する。

何時間も連続で、一切の休みも入れずに話し合う。お互いの近況とか、自分がどれだけ……相手を好きなのかを。
その時間が、一番幸せだった。

帯

「あの、機種変お願いします」

私は携帯電話を変えることにした。
声が聞こえ辛かったり、良く勝手に電源が落ちたりするのだ。
友達も不便だし買えというし、仕事用にも使えない。

「どちらで」

「この、赤いやつで」

色々支障があったので、私は泣く泣く携帯を変えることにした。
可愛いデザイン、赤い携帯だった。

「お持ちの携帯はこちらで再利用できますので、お預かりしてよろしいですか？」

店員の人は機種変更が終わるとそんなことを聞いてきた。

例えばコレが携帯として話が出来なくても、これは私の宝物だ。

「いえ、彼からのプレゼントですから」

電

『っー……っー……っー……』

何度掛けても通じない。

何度掛けても、ミチタカは電話に出ない。

番号は変わっていないし、ミチタカも私の番号を登録している。

私は不審がつて、彼の実家に電話を掛けた。

「こんにちは。あの、コムロです。ミチタカさん、何かあったんですか？ 携帯、繋がらなくて」

「ああ、コムロちゃん？」

おばさんの声。

「何言っているの？ ミチタカは半年前に亡くなったじゃない」

私は絶句した。

話

私は最愛の人が亡くなっていったと知って、必死に電話を掛けた。

新しい携帯電話ではなく、古い塗装の禿げた携帯電話。

地のプラスチックを残らず剥ぎ取るように、必死に握ってその番号へかける。

これは、私とミチタ力を唯一繋いでいた電話だ。

だから、例えミチタ力が天国に居たって、私とミチタ力を繋いでくれるのだ。

今までだって、ミチタ力と私を繋いでくれていた。

だからきつとこれから、そしていつまでも。

この電話は私の心の支えになってくれるし、私を慰めてくれる。

「お願い、でてよあ……」

彼の彼の声はない。

聞こえてくるのは、

『つー……つー……つー……』

「なあ、あの子。まだ竦っているのか？」

「ええ、週末はいつも籠っているのよね。まだ、立ち直れないのかしら」

「いつその事、アレを取り上げてみたらどうだ？ 半年前に壊れてたんだろ？」

「駄目よ。痼癢を起こして暴れて塞ぎこむだけよ。宝物だって言っていたし」

「今までもそうだったが、今はさらに酷いな。どうにかできないかな」

「道隆君が死んで、立ち直ったと思ったたらこれだもの」

「普段はなんともないのにな」

「でも、ずっと前から携帯電話を当てて独り言いていたわ」

「なんだ？ 壊れてないんじゃないか？」

「いいえ、壊れてたわよ。耳を凝らして聞いても、携帯電話からはなにも聞こえなかったわ」

私は聞く。

一人暗い部屋で。

携帯電話を耳に当てる。

聞こえてくる。

『つー……つー……つー……』

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8047a/>

携帯電話？

2011年1月13日08時35分発行